

アトピー性皮膚炎 ～母と子の関係性～



にしのカイロプラクティック院

院長 西埜義則 B.C.Sc

【患者】

一歳六カ月 女の子

【既往歴】

生後八カ月で渗出性中耳炎の診断。鼓膜切開の後、チューブ挿入を勧められるが、当院でのアクティベータ・メソッド(以下AM)による施術で完治。

【主訴と治療歴】

小児科にてアトピー性皮膚炎と診断。その症状は全身に及んでいるが、特に顔、頸部、背部、腹部にジュクジュクした湿疹とひっかき傷が多数みられる。

皮膚に強い炎症が生じている時には、抗炎症作用と免疫抑制作用を備えた副腎皮質ステロイド薬の外用薬を使用。炎症が鎮まれば、皮膚のバリア機能を強くするために保湿剤外用薬にてスキンケアをおこなっている。

また、血液検査の結果から、アレルギーを起すことされる食品(玉子、牛乳、米、小麦)を食べさせないように除去食による食事療法を実践している。

【検査】

心身条件反射療法(以下

難であったため、「緊張パターン」のみのアジャストメントをおこなった。

そして、子供の治療と平行して、母親の「疲労」に対しての原因をパターンチャートから分析すると、「五感」↓視覚↓人、「味覚」↓食事全体、「分野」↓家族という

情報を得られた。詳細な分析をおこなうと、生活上のストレスと食事療法の是非についてという「緊張パターン」が

判明した。母親の「緊張パターン」を分析している最中、子供が身体を痒がり始めた。このように、子供は言葉の意味が理解できなくとも、母親の抱いている不快な心の様子を肌感

じて、精神的ストレスを共感しているようである。

食事療法の是非については、感情チャートから「不信」と、いくつかのキーワードが得られた。「このまま除去食を続けること

で、アトピー性皮膚炎が良くなるのか?」と、いう感情である。食事療法については、特定の食品

が患者に適合しているのかを、PCR Tの「全体的適合検査法」を用いて検査をおこなった。

普段から食べさせている食品と、除去している食品を一つずつ子供

に持たせて、

神経反射による筋力抵抗検査を代理検査にておこなうが、不適合を示すものはみられなかった。

この検査結果により、母親から除去食へのこだわりが消えて、安心して何でも食べさせようという気持ちの変化とゆとりができた。アトピー性皮膚炎の子供を持つ母親は、往々にしてインターネットや専門雑誌などで、さまざまな情報を得ていることが共通している。また、アトピー性皮膚炎の子供を持つ母親達のコミュニティでも情報交換がされている。

「〇〇はアトピーに良くない」と、いう「情報」が、アレルギー反応を生じさせる病的な条件反射を強くさせるようである。つまり、アレルギーという知識と情報が、アレルゲンの本質的原因となることが多いようである。アレルギー反応の有無に関わらず、「この食品は、アトピー性皮膚炎に良くない。」と、いう固定観念が先にあり、その食

品に対する潜在意識がアレルギーを引き起こす原因になっていたというのである。

以上のことを踏まえて、「生活上のストレス」と「食事療法の是非について」の緊張パターンを、身体に影響しないように視点を切り替える治療をおこなった。

三回目までは子供へのハーブ面への治療で、四回目に母親の治療と同時におこなった結果、「就寝時の痒みが治まって、朝まで起床することはなかった。」と、翌朝に報告を受けた。その後、継続して同様の治療をおこなったが、三週間後には全身の皮膚炎はまったくなくなり、幼児らしい潤いのある綺麗な肌に戻った。現在、薬剤によるスキンケアはおこなっていないが、再発の様子はみられない。母子とも健康管理として、当院にて定期的メンテナンス治療をおこなっている。

今回のケースにおいて、母親は我が子の心身状態と欲求を、常に敏感に感じ取ろうとしていることと同様に、子供は母親の呼吸、仕草、表情、態度、声のトーンなどから母親の心理情報を読み取ろうとすることが考えられる。

母と子の関係性には、言語によるコミュニケーションを交わさなくとも、非言語コミュニケーションを通じて、お互いの快・不快、喜怒哀楽を伝え合っている。このとき、子供にとって不快な情報が得られたならば、それは大きな精神的ストレスになり得る。その症状を誘発したと考えることができる。

難であったため、「緊張パターン」のみのアジャストメントをおこなった。

そして、子供の治療と平行して、母親の「疲労」に対しての原因をパターンチャートから分析すると、「五感」↓視覚↓人、「味覚」↓食事全体、「分野」↓家族という

情報を得られた。詳細な分析をおこなうと、生活上のストレスと食事療法の是非についてという「緊張パターン」が

判明した。母親の「緊張パターン」を分析している最中、子供が身体を痒がり始めた。このように、子供は言葉の意味が理解できなくとも、母親の抱いている不快な心の様子を肌感

じて、精神的ストレスを共感しているようである。

食事療法の是非については、感情チャートから「不信」と、いくつかのキーワードが得られた。「このまま除去食を続けること

で、アトピー性皮膚炎が良くなるのか?」と、いう感情である。食事療法については、特定の食品



品に対する潜在意識がアレルギーを引き起こす原因になっていたというのである。

以上のことを踏まえて、「生活上のストレス」と「食事療法の是非について」の緊張パターンを、身体に影響しないように視点を切り替える治療をおこなった。

三回目までは子供へのハーブ面への治療で、四回目に母親の治療と同時におこなった結果、「就寝時の痒みが治まって、朝まで起床することはなかった。」と、翌朝に報告を受けた。その後、継続して同様の治療をおこなったが、三週間後には全身の皮膚炎はまったくなくなり、幼児らしい潤いのある綺麗な肌に戻った。現在、薬剤によるスキンケアはおこなっていないが、再発の様子はみられない。母子とも健康管理として、当院にて定期的メンテナンス治療をおこなっている。

今回のケースにおいて、母親は我が子の心身状態と欲求を、常に敏感に感じ取ろうとしていることと同様に、子供は母親の呼吸、仕草、表情、態度、声のトーンなどから母親の心理情報を読み取ろうとすることが考えられる。

母と子の関係性には、言語によるコミュニケーションを交わさなくとも、非言語コミュニケーションを通じて、お互いの快・不快、喜怒哀楽を伝え合っている。このとき、子供にとって不快な情報が得られたならば、それは大きな精神的ストレスになり得る。その症状を誘発したと考えることができる。

難であったため、「緊張パターン」のみのアジャストメントをおこなった。

そして、子供の治療と平行して、母親の「疲労」に対しての原因をパターンチャートから分析すると、「五感」↓視覚↓人、「味覚」↓食事全体、「分野」↓家族という

情報を得られた。詳細な分析をおこなうと、生活上のストレスと食事療法の是非についてという「緊張パターン」が

判明した。母親の「緊張パターン」を分析している最中、子供が身体を痒がり始めた。このように、子供は言葉の意味が理解できなくとも、母親の抱いている不快な心の様子を肌感

じて、精神的ストレスを共感しているようである。

食事療法の是非については、感情チャートから「不信」と、いくつかのキーワードが得られた。「このまま除去食を続けること

で、アトピー性皮膚炎が良くなるのか?」と、いう感情である。食事療法については、特定の食品

が患者に適合しているのかを、PCR Tの「全体的適合検査法」を用いて検査をおこなった。

普段から食べさせている食品と、除去している食品を一つずつ子供

に持たせて、

神経反射による筋力抵抗検査を代理検査にておこなうが、不適合を示すものはみられなかった。

この検査結果により、母親から除去食へのこだわりが消えて、安心して何でも食べさせようという気持ちの変化とゆとりができた。アトピー性皮膚炎の子供を持つ母親は、往々にしてインターネットや専門雑誌などで、さまざまな情報を得ていることが共通している。また、アトピー性皮膚炎の子供を持つ母親達のコミュニティでも情報交換がされている。

「〇〇はアトピーに良くない」と、いう「情報」が、アレルギー反応を生じさせる病的な条件反射を強くさせるようである。つまり、アレルギーという知識と情報が、アレルゲンの本質的原因となることが多いようである。アレルギー反応の有無に関わらず、「この食品は、アトピー性皮膚炎に良くない。」と、いう固定観念が先にあり、その食

品に対する潜在意識がアレルギーを引き起こす原因になっていたというのである。

以上のことを踏まえて、「生活上のストレス」と「食事療法の是非について」の緊張パターンを、身体に影響しないように視点を切り替える治療をおこなった。

三回目までは子供へのハーブ面への治療で、四回目に母親の治療と同時におこなった結果、「就寝時の痒みが治まって、朝まで起床することはなかった。」と、翌朝に報告を受けた。その後、継続して同様の治療をおこなったが、三週間後には全身の皮膚炎はまったくなくなり、幼児らしい潤いのある綺麗な肌に戻った。現在、薬剤によるスキンケアはおこなっていないが、再発の様子はみられない。母子とも健康管理として、当院にて定期的メンテナンス治療をおこなっている。

今回のケースにおいて、母親は我が子の心身状態と欲求を、常に敏感に感じ取ろうとしていることと同様に、子供は母親の呼吸、仕草、表情、態度、声のトーンなどから母親の心理情報を読み取ろうとすることが考えられる。

母と子の関係性には、言語によるコミュニケーションを交わさなくとも、非言語コミュニケーションを通じて、お互いの快・不快、喜怒哀楽を伝え合っている。このとき、子供にとって不快な情報が得られたならば、それは大きな精神的ストレスになり得る。その症状を誘発したと考えることができる。

難であったため、「緊張パターン」のみのアジャストメントをおこなった。

そして、子供の治療と平行して、母親の「疲労」に対しての原因をパターンチャートから分析すると、「五感」↓視覚↓人、「味覚」↓食事全体、「分野」↓家族という